コミュニケーション能力を育むカリキュラム・マネジメント
― 児童の実態を踏まえたカリキュラム開発 ―

学校力開発分野（17220917）髙　橋　真　江　美

コミュニケーションは，いつの時代においても重要だと言われるものだが，その能力の育成については多くの困難を抱えている。本研究では，このようなコミュニケーション能力の育成についてカリキュラム･マネジメントの視点から考察していくことを目的とした。児童の実態を踏まえたカリキュラムを作成し，その変容を確かに見取るための評価を工夫することで指導と評価の一体化が図られ，児童のコミュニケーション能力育成につながることが明らかになった。

［キーワード］　コミュニケーション能力，　カリキュラム・マネジメント，ルーブリック評価

１　問題の所在と方法

(1) 現状と課題

コミュニケーションは，生きていく上で欠かせない重要なものにもかかわらず，教育現場では児童のコミュニケーション能力の育成について多くの困難を抱えている。

小学校学習指導要領実施状況調査報告書（国立教育政策研究所 2015）においても，「話し合いの流れを踏まえ，話し手の意図を明確に押さえた上で質問する」ということについて継続的な課題があることを明らかにしている。この結果からは，こうした力が思考を深めたり，良好な他者との関係を築いたりする上で不可欠であるという認識を持ちながらも，系統的な指導を計画・実施・評価することが十分でなかったと言える。コミュニケーション能力は，児童全員が発達段階に応じて等しく身につけていくものではないにもかかわらず，児童が成長の過程で自然に身につけていく力と捉えていることや，児童同士のことばのやりとりの評価を国語の一部の学習だけで実施し，教育活動全体で育成するカリキュラム化を進めてこなかったことが要因として考えられる。筆者の実践をふり返ってみても，国語科の「話すこと･聞くこと」の単元だけで児童の学びが終始し，コミュニケーション能力の育成につながるものではなかった。

新学習指導要領では，コミュニケーション能力を含む言語能力の育成を図るため，各教科等の特質に応じて児童の言語活動の充実することが示された。現行の学習指導要領においても，全ての教科等において言語活動を重視し充実を図ってきたところであるが，今後，主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善に取り組んでいくためには，より一層その充実を図り，言語能力を向上させることが必要不可欠である。これは，カリキュラム・マネジメントの視点が，国語科を中心としながら他教科等と関連づけて言語能力の向上を図るためには欠かせないことを意味している。

また，高木(2017)は，「児童の成績をつけるために行うことが多く，評価の結果から児童一人一人の成長や全体の課題を捉えて次の指導に生かす観点や段階間や教科等間の接続に対する意識が欠けている。さらには，評価にかける時間の確保や評価基準の妥当性といった課題も残したまま，日々の授業を進めている現状もある。」と示している。こうした見解は，筆者が現場で感じてきたことと重なるところが大きい。

以上のことから，コミュニケーション能力の育成にあたっては，教員一人一人がカリキュラム・マネジメントの視点を持ち，児童の実態を踏まえた指導計画を作成，実践し，さらにはその変容を見取る評価をしっかりと行い，その結果を次の指導に活かすとともに，児童にフィードバックしていくことが重要であると考えている。

(2)研究の目的と方法

これらの現状と課題を踏まえ，はじめにコミュニケーション能力とはいかなるものかを捉えることとした。村松(2013)は，コミュニケーションには言語的と非言語的なものがあるとした上で，教育の場では，「他者とことばのやりとりを通じて，思いや情報，考えなどを共有すること」を一次的

定義とし,「その結果,相互理解や認識を深めたり,合意を形成したりすること」を二次的定義としている。また，コミュニケーション能力とは，他者とことばを交わすことによって「分かち合う」部分を増やし，それを土台にして，相互理解や認識を深め合う力としている。これは，新学習指導要領に示される「主体的・対話的で深い学び」につながる力である。さらに村松は，図１に示すように，コミュニケーションの五つの類型とコミュニケーション能力の三つの要素を提示し，それらを段階的に指導していくことが重要だとしている。その上で,「話線（話し手から聞き手へのことばの届き方)」が交流することで，相手のことばを一旦受け入れてから返すことが目指すコミュニケーションの姿だとしている。以上のことは，現行のみならず新学習指導要領の国語科等に示される目標や内容に準ずるものである。

次に，学習評価について見ると，新学習指導要領(2017)では,「児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し，学習した意義や価値を実感できるようにすること」「各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から，単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して，学習の過程や成果を評価し，指導の改善や学習意欲の向上を図り，資質・能力の育成に生かすようにすること」と示されている。

以上のことを踏まえ，本研究では，つけたい力を明確にして児童の実態を踏まえたカリキュラムを作成し，その変容を確かに見取るための評価を工夫することで指導と評価の一体化が図られ，児童のコミュニケーション能力育成につながるということを明らかにする。

２　実践と考察

(1)実習Ⅱにおける実践の概要

①児童の実態とつけたい力の吟味

本研究を進めるにあたり実習校である山形県内 A 小学校第 1 学年8名（含む特別支援学級在籍児童1名）を対象に実践を試みた。コミュニケーション能力については，国語科を中心にしながら，各教科等においてはっきり話すことと黙って最後まで聞くことを目標として学習しており，その2点については身についている児童が大半であった。8月に担任が国語科で行った授業『夏休みのことを知らせよう』では，話し手側に目標の主眼を置き，いつ，どこで，だれと，何をして，どう思ったかを伝える学習をした。その目標は全員が達成できたが，聞いたことへの質問はほとんど出なかったことが担任の記憶に残っていた。

児童一人一人について見てみると，教師の問いかけに進んで答えようとする児童が大半であった。各教科等の学習で積極的に挙手をして発言する姿が全員に見られるものの，その時の気分や教科に対する苦手意識，友達との関係などの理由から発言に対する意欲をなくすことがある児童もいた。特に児童Ａは，話すことはあまり好きではなく，苦手だと感じているということが本人への聞き取りでわかった。

聞くことに関しては，話を真剣に聞こうとし，聞いてわからない場合には,「もう一度言ってください。」と言える児童が多かった。聞き取る力には個人差があり，個別の支援を要する児童もいた。

児童同士の人間関係は，特別支援学級在籍の児童Bに対して他の7名が支持的な関係を築いている点が特徴的であった。普段から児童Bに対してはその心情を慮る声掛けをしていることが多く，国語，算数の授業以外のほとんどの授業は8名で学習し，休み時間も一緒に遊ぶことができていた。

一方で，7名に限ってみると，授業中は互いの発言に耳を傾け，特に算数の時間などには，考えを発表した児童に対して質問することができていた。休み時間などには，互いの話を聞かずに自分の主張を押し通そうとしたり，そのような特性を持つ児童同

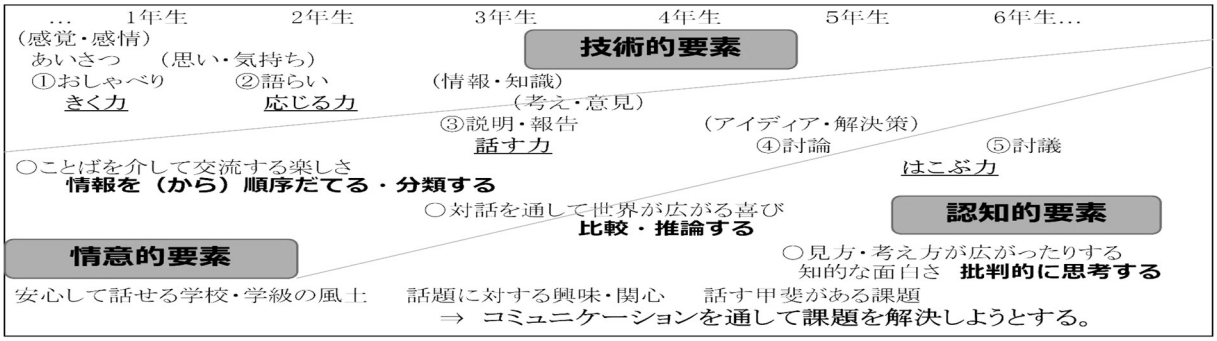

図１　コミュニケーション能力の構成　筆者作成

士が接触を避けたりする場面もときどき見られた。

こうした実態を踏まえ，担任と話し合い，聞き手に主眼を置いた質問する力（聞いて訊いて返す力）の育成を目指すことにした。

②短期カリキュラムの作成と評価方法の検討

まず，国語科で使用している教科書の単元配列を見て，その言語活動の類型と目標を分析した。本実践以前の学習では，話し手に主眼を置いた活動が組まれ，はっきりと伝わるように話すことや順序よくつたえること，自分の思いを伝える意欲を高めることなどを目的とした単元が行われていた。一方，以後の学習では，年度末の単元にペアで質問し合って合意形成を図りながらクイズを作成するという単元が組まれていた。また，実習期間後に書くことの単元として，『おうちの人に知らせよう』という報告文の学習単元が予定されていた。

①②のことを踏まえ，学校目標や学年目標への意識，他教科等との関連も視野に入れながら，特設単元『おはなし会・きいてきいて』を含む短期カリキュラム構想を図2のように作成した。特設単元の指導計画は表1に示すとおりである。

評価については，表2に示すとおり，具体的でわかりやすく日常的に活用できる簡易的なルーブリックを作成し，必要に応じて指導の見直しを加えて使っていくこととした。評価項目や基準については，同校で使用している光村図書の国語科教科書指導書を参考にして作成した。

表１ おはなしタイム『きいてきいて』単元計画 筆者作成

	学習活動	目標や留意点
授業１	１対多や１対１の形式で質問する	話しやすい話題を選ぶ。ことばのやり取りを楽しむ。
朝の会	１対多の形式 話し手を児童が日替わりで行う。	授業１で使用した「質問のたね」や「質問名人のこつ（ルーブリック）」を掲示
授業２	生活科の学習で見つけた「秋」について話し合う。	これまでの学習をいかして質問する。話した内容を報告文に活かせるようにする。

表２ 簡易的ルーブリック 筆者作成

観点	基準		
	A	B	C
姿勢	頷いたり，相槌をうったりしながら	相手を見て話す，聞く。適切な声の大きさで話す。	集中して聞くことが難しい。
質問の内容	聞いた内容をさらに詳しくするような	未知のことや自分が聞いてみたいことを，例なども参考にしながら尋ねる。	内容を聞き取れない。支援を受け質問する。
尋ね方返し方	語尾上げて困ったときにフォロー	丁寧な言葉遣い，やさしい言い方で尋ねる。	ぶつぶつと棒読みで
感想の述べ方	自分の考えを入れて	簡単に一言添える程度の感想が言える。	感想を述べることは難しい。

（２）考察

授業1では，4つの観点とも7名全員がB評価になったが，中には話す相手やその時の話題によってAになったりCになったりする様子を見取った。また，筆者と担任が考えていた以上に，頷いたり相槌を打ったりすることが児童にとって難しいということもわかった。その結果を受けて担任が翌日，道徳の授業に

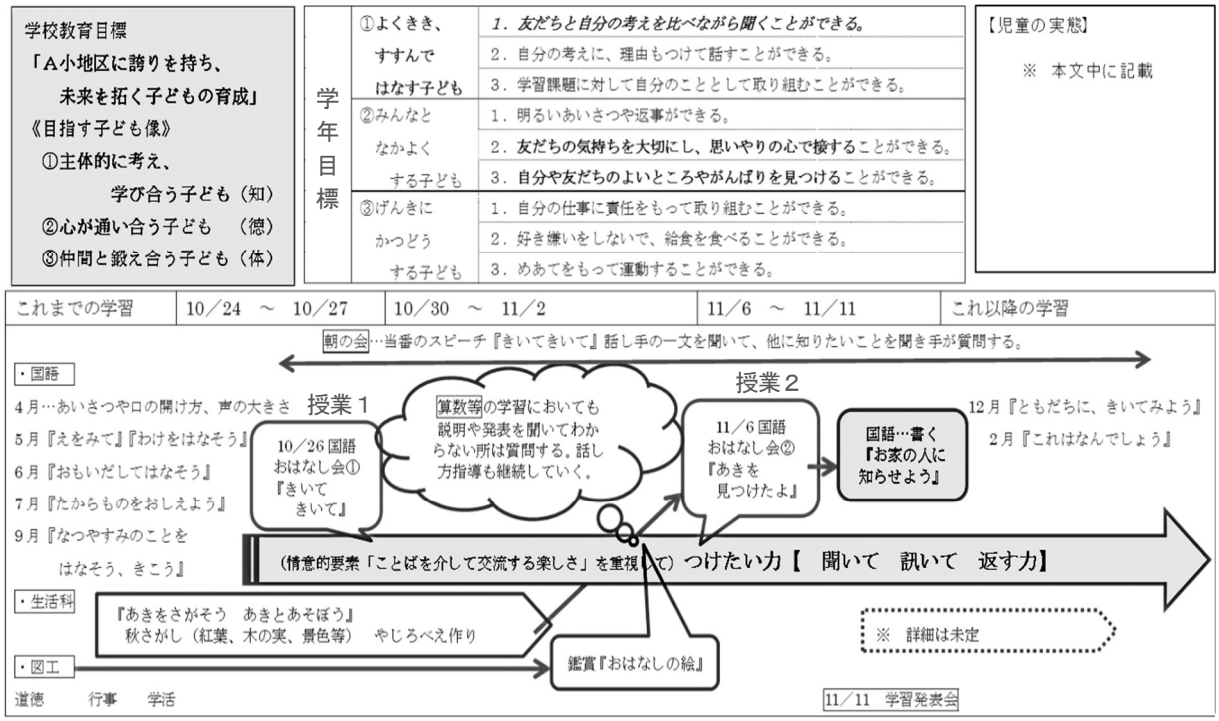

図２ 短期カリキュラム構想 筆者作成

カードを使って好きなものについて語らう活動を取り入れ，頷きや相槌の体験を意図的に行った。次に示すのは授業後の児童が発表した感想である。

> 語り合ったことをヒントにしたクイズを紙に書き、それが誰のことを表しているかを当てる活動をした後に述べた感想
> （　）内は筆者が加筆
> 児童C：ぼくはクイズが楽しかったんだけど、Dちゃんとかは（当ててもらう順番が）最後だったから、（答えがばれていて）つまらなかったと思う。
> 児童D：私は当ててもらうのは最後だったけど、とても楽しかったです。みんなの好きなものとか色とかわかったし、「へえ。」とか「そうなんだあ。」とか「やっぱり」とか言って聞いて、聞いてもらって楽しかったからです。
> 児童C：「そうなの。よかった。」（笑ってつぶやく。）

他の児童も語らいの楽しさを述べる感想を話したことからも，担任の判断で行われたフィードバックが効果的だったと言える。

次に，朝の会のお話タイムで，児童Bが話し手になった時の聞き手児童7名の評価が，全ての観点においてもっとも良かった。次に示すのは，その時の児童の対話の一部である。

> 児童B：ぼくは、バスでお出かけをしました。
> ～ 中略 ～
> 児童E：ぼくは、お金を払うバスにあんまり乗ったことないけど、Bくんはうまく乗れましたか。
> 児童B：はい、乗れました。（E他：へえ、すごい。等）
> 児童A：楽しかったですか。
> 児童B：はい、楽しかったです。（笑顔で）
> 児童E：また行きたいですか。
> 児童B：はい、行きたいです。（もっと笑顔で）
> ～ 中略 ～
> 児童A：自分で乗ったところがすごかったです。

この対話からは，Ｂ児に対する周囲の児童の思いやり（情意的要素）を見ることができる。路線バスに乗って出かけたという話題や類似した体験が自分にもあったことが，他の児童の興味・関心を引いたことが挙げられる。車内での飲食について訊いた児童は，貸し切りバスで出かけた際におやつを食べたことを思い出して質問するといったように自分の体験をもとにした発言がいくつもあった。

次に，児童Bと他の児童の間に築かれた支持的な人間関係という点からみてみる。「いつ」「どこで」「だれと」を訊くだけではなく，出かけた理由やその時の気持ちを尋ねたり，「へえ，知らなかった。」という相槌を打ったりしているところから，他の児童が児童Bのことをもっと知ろうとしていることがわかる。児童Bもまた，終始笑顔で話していることから，みんなと話せてうれしいという感情を抱いたことがわかる。あわせて，話すのは苦手と言っていた児童Aが自ら質問し感想を述べたのもこの回だけであった。これらのことは，村松(2013)が示す情意的要素に大きく重なる。

以上のことから，情意的要素を重視した指導をカリキュラムに位置付け，日々の授業の中で育成することが欠かせないことが明らかになった。また，ルーブリックが児童の変容の見取りを確かなものにするとともに，記録としても有効であることがわかった。

３　到達点と今後の課題

本研究では，短い期間でのカリキュラムであっても見通しと見取りをつなげて指導していくことの有効性が明らかになった。また，聞き手に焦点を当てることで，学習指導と生徒指導の両面からコミュニケーション能力育成に向かうことが促されることがわかった。

今後は，長期的なスパンでカリキュラムを作成するとともに，学期等を一つのユニットとして児童の姿からカリキュラムの見直しを行っていく。また，ルーブリックを児童とともに作っていくことで，より主体的・対話的で深い学びに迫ることも課題である。

引用・参考文献

国立教育政策研究所(2015)「小学校学習指導要領実施状況調査報告書」，https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shido_h24/point.pdf(最終閲覧日 2018 年 1 月 29 日)

村松賢一(2013)『コミュニケーション能力を育てる授業づくりの秘訣』，教育報道出版社，pp.13 - 17.

文部科学省(2017)「小学校学習指導要領」，http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm(最終閲覧日 2018 年 1 月 29 日)

錦織圭之介(2017)『小学校　新学習指導要領ポイント整理』，東洋館出版社，pp.15 - 16，57 - 58.

高木展郎 (2017)「中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会　児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ（第２回）資料」，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/080/siryo/__icsFiles/afieldfile/2017/12/15/1399427_1.pdf(最終閲覧日 2018 年 1 月 29 日)

Curriculum Management to Nurture Communication Skills at Elementary School : Curriculum Development Based on the Realities of Children

Maemi TAKAHASHI